被災地の自治会活動「男の料理教室」の効果：フォーカスグループインタビュー分析

佐藤香菜子[1]　木下ゆり[2]　黒田藍[3]　久地井寿哉[4]　伊藤常久[5]
石井なつみ[6]　伊東尚美[7]　三浦優佳[8]　福田吉治[3]

1 金沢学院短期大学　2 愛知学院大学　3 帝京大学大学院公衆衛生学研究科　4 公益財団法人エイズ予防財団
5 東北生活文化大学　6 医療法人かしの木内科クリニック　7 福島県立医科大学医学部
8 公益財団法人味の素ファンデーション（The Ajinomoto Foundation：TAF）

背　景

(1)宮城県東松島市と東日本大震災

宮城県東松島市の人口：37,499人(2025年10月1日)
市内は8地区に分かれている
（自治会数：69）

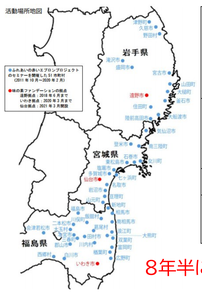
図1　東松島市の小野地区新道町内会自治会の位置

【2011年3月　東日本大震災の災害規模】
マグニチュード　9.0
震度　6強
津波　10.35 m

【被災状況】当時の人口：43,142人(2011年3月1日)
死者　1,110 人
行方不明者　24 人
避難所　106 箇所
避難者　15,185 人

(2)ふれあいの赤いエプロンプロジェクト

- 公益財団法人 味の素ファンデーション(The Ajinomoto Foundation：TAF)
- 東日本大震災後、復興応援「ふれあいの赤いエプロンプロジェクト」を実施



事業目的	①被災者の食生活と栄養状態の改善 ②災害で破壊された地域コミュニティの再生・活性化への貢献を通じた復興応援
事業内容	各地域のパートナー団体(行政、社会福祉協議会、自治会等)と連携した取組 アウトリーチ型「料理教室」
テーマ	いっしょに作って、いっしょに食べよう
活動実績	実施回数：3,771回 参加人数：延54,434名

8年半にわたる食を通じた復興支援活動

詳細は
こちら⇒

図2　ふれあいの赤いエプロンプロジェクト活動地域

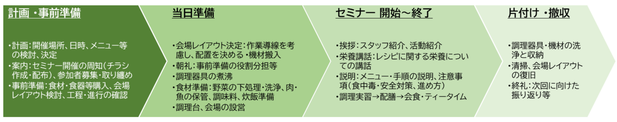


図3　ふれあいの赤いエプロンプロジェクト「料理教室」の流れ

(3)新道町内会自治会「男の料理教室」開催経緯

2011年3月～　避難所以外に在宅避難者も多かった
自治会役員が毎日避難所から支援物資を在宅者に配布
（市内で唯一の取り組み）
⇒　震災前から自治会の組織力あり　被災時も共助
⇒　一人暮らしの男性も多く、孤立している状況が課題

＊社会福祉協議会を通じて赤いエプロンプロジェクトを知った

2017年6月～2020年2月(TAFによる直接支援)
孤立しがちな男性の社会参加の促進を目的にTAF支援のもと
男性のための料理教室開始　延参加者数：242名

＊男性にとって、男性だけの活動の方が参加しやすいという背景から、男女別にそれぞれ料理教室を実施
＊自治会長は住民の状況をほぼ把握　配偶者が亡くなった方や配食サービスを始めた方など(約20名)に優先的に声掛け

2020年3月～ 自治会主体で男の料理教室開催(3～4回／年)
(TAFによる後方支援)

＊講師役は自治会女性陣
＊前年度のうちに自治会の事業計画に入れて予算を確保
＊参加費は500円、不足分は自治会で補填
＊行政区による自治会世帯数(住民数)：463世帯(1,100人)

図4　自治会による男の料理教室の様子(2022年11月)

目的

東日本大震災をきっかけに、自治会が主体となって継続している「男の料理教室」の活動の効果を明らかにする。

方法

(1)調査日　2022年11月
(2)調査場所　宮城県東松島市内
(3)調査方法　・新道町内会自治会が主催する料理教室参加者　男性7名
・フォーカスグループインタビュー
・インタビュー時間　70分
・帰納的・記述的方法による分析

インタビューは下記の5つのテーマで行った
1)震災後の個人・地域の課題
2)男の料理教室に参加しようと思った理由
3)料理教室の効果
4)活動継続と自主活動への移行
5)今後の展望

グループインタビュー対象者の属性・特性は表1のとおり

表1　グループインタビュー対象者の属性・特性

	年代	性別	料理教室への参加のきっかけ・動機・活動での立場
A	70代	男性	自治会長　5～6年間料理教室を続けている　男性は声をかければ来る　お願いじゃなくて「来なさいよ」ってピンポイントでいう
B	70代	男性	会長と同級生　退職して暇だった　みんなの顔をみたくて参加
C	70代	男性	石巻で被災後、復興住宅に居住 お茶会など誘ってもらっているうちに料理教室に参加
D	60代	男性	旧仮設住宅等でこのプロジェクトに協力 印刷物・準備物の協力　地域づくりのため
E	50代	男性	高齢者施設を運営していて職員が交代で料理教室に参加 お茶会のお手伝いから始まった
F	70代	男性	会長に誘われた　それまで包丁持ったことなかった 行ってみたら面白かった　また行ってみようと思った みんなで一緒にやるスタンスがよい
G	70代	男性	会長から声をかけられた　最初はそんなに面白そうだとは思わなかった　自治会の動き(男性のために動く)があり参加した 年をとると手が震えてくる　家では作らない 料理教室では皆さんにお任せ　雰囲気を見る

倫理的配慮

本研究の実施については、東北生活文化大学・東北生活文化大学短期大学部研究倫理委員会の承認を得た。(承認番号R4-14)

結果

インタビュー調査から、活動の効果として、3つの共通するカテゴリーが得られた。　「　」：参加者の発言

男性の交流の場づくり

「来ればみんなに会えてうれしい」
「よいコミュニケーション」
「人見知り、人と顔を見合わせる楽しみ」
「(普段は)一人でしゃべる人いないから」
「(今日来てないが奥さん亡くなっている方)参加したいと言っている」
→交流・つながりに関する気持ちの表出

男性同士で集うことが少ないため、
交流の場として料理教室が有効に機能

料理技術の習得と挑戦

「緊張感もある、包丁持ったり、天ぷらで油使ったり」
「料理の楽しさを少しずつ」
「料理に自分が立ち会える楽しみ」
「全員楽しかったって言う」
「次はいつやるんだろう」

料理技術の習得と
意欲の向上

ジェンダーバイアスの気づきと受け止めの変化

「女房が亡くなって、包丁持って少しでもやれるように」
「(娘と同居)たまには一人で作りたい、チャレンジしたい気持ちはある」
「最終的に願っているのは、女性の力を借りずに本当に男だけで」
「15年後、男だけでできるように」

男性が料理をすることについて
肯定的に変化

考察

- 男性のみの料理教室は、男性にとって参加しやすく、社会参加につながり、料理技術の習得と意欲の向上、ジェンダーバイアスへの気づきと受け止めの変化などの効果がみられた。
- 既存の自治会活動に料理教室を加えたことで、継続的に取り組むことができ、震災後の男性の自立生活支援と孤立予防および地域コミュニティーの再構築の一助となった。

謝辞　：「ふれあいの赤いエプロンプロジェクト」の料理教室に関わられた皆様、東松島市新道町内会自治会の皆様に、こころより感謝申し上げます。

日本公衆衛生学会COI開示　：　演題発表に関連し、開示すべきCOI関係にある企業等は下記のとおり。
受託研究：公益財団法人味の素ファンデーション